

# Relief

[リリーフ]

2018  
JANUARY  
Vo1. 30

## CONTENTS

- 救急フェスタin神戸  
第5回 いのちのリレー大会
- 平成29年度 第4回・第5回・第6回  
いのちのセミナー
- 平成29年度公募助成活動紹介



公益財団法人

JR-West Relief Foundation

JR西日本あんしん社会財団



27チームが、「小学生」「中学生」「高校生・大学生」「一般」（一部混成チーム含む）の4ブロックに分かれ、倒れている人に対して心肺蘇生とAEDを使う救命処置を1チーム3名で協力して行い、処置の的確さを競っていただきました。各ブロック上位2チームが決勝に進出しました。



# 救急フェスタin神戸 第5回 いのちのリレー大会を 開催しました

11月3日（金・祝）秋晴れの中、JR神戸駅南 デュオドームにて「救急フェスタin神戸～第5回いのちのリレー大会～」を開催しました。（主催：JR西日本あんしん社会財団・西日本旅客鉄道株式会社、共催：日本AED財団）  
今回、神戸地区で初めての開催で、神戸市消防局・神戸市消防協会・兵庫県教育委員会・神戸市教育委員会・京都橋大学救急救命研究会・117KOBEぼうさいマスター育成会議（神戸市・神戸新聞社）の方々にご協力いただき、大いに盛り上がった大会となりました。

## 開会式

たいへん多くの出場申込があり、抽選によって選ばれた小学生から大人までの過去最多27チームに出場いただきました。神戸駅長の開会宣言と昨年度大阪大会の優勝チーム「石小あんぱんズ」による元気な選手宣誓で幕を開けました。



開会宣言



選手宣誓

### Aブロック (小学生)



石小あんぱんズ



チームやまびこ



チーム劇場型 チェーン オブ サバイバル  
～救急隊に引き継ぐまで～



MKN32



神戸第47団ボーイ隊



ポーアイコードブルー～引見大（急行隊）～



ライフサポート

### Bブロック (中学生)



京都聖母学院Bチーム



神陵台B



チーム「IKUNO～助け隊3年～」



Team東落合



いさしーず



チーム「IKUNO～助け隊2年～」



神陵台A

### Cブロック (高校生・大学生)



啓明学院ワンダーフォーゲル同好会



京都精華学園高等学校A



117KOBEぼうさいマスター育成会議B



IVUSA CMT インストラクター



京都聖母学院Aチーム



京都精華学園高等学校B



117KOBEぼうさいマスター育成会議A

### Dブロック (一般)



ちっくるたるさけ



東播磨地域防災の会



ポー住A



動くのはパイセン



中仁野壮年会



ポー住B



決勝

予選を突破した「チーム劇場型 チェーン オブ サバイバル～救急隊に引き継ぐまで～」、「MKN32」、「チーム『IKUNO～助け隊3年～』」、「チーム『IKUNO～助け隊2年～』」、「117KOBEぼうさいマスター育成会議A」、「IVUSA CMT インストラクター」、「動くのはパイセン」、「ちっくるたるさけ」の8チームによる決勝を行いました。3通りの場面設定ごとに、予選と同じく1チーム3名で救命処置を行い救急隊に引き継ぐまでを本番さながらに協力して実演、熱戦が繰り広げられました。

決勝の競技の模様を救命処置の手順に沿って紹介します

①周囲の安全確認



「右ヨシ、左ヨシ」  
「上ヨシ、足元ヨシ」

チーム劇場型 チェーン  
オブ サバイバル

②意識の確認



肩をたたき  
呼びかける

MKN32

③協力者に依頼



119番通報と  
AED手配

動くのはパイセン

④呼吸の確認



10秒以内に  
正常な呼吸の  
有無の確認

チーム  
「IKUNO～助け隊3年～」

⑤胸骨圧迫



強く、速く、  
絶え間なく

117KOBE  
ぼうさいマスター育成会議A

⑥人工呼吸



気道確保して  
2回吹きこむ

チーム  
「IKUNO～助け隊2年～」

⑦電気ショックの実行



AEDの音声に  
したがって

ちっくるたるさけ

⑧救急隊員に引き継ぎ



状況を説明

IVUSA CMT  
インストラクター

表彰式

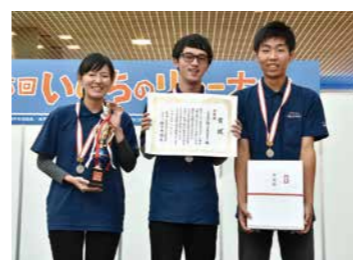
優勝	117KOBEぼうさいマスター育成会議A
準優勝	IVUSA CMT インストラクター チーム劇場型 チェーン オブ サバイバル～救急隊に引き継ぐまで～
敢闘賞	MKN 32 チーム「IKUNO～助け隊2年～」 チーム「IKUNO～助け隊3年～」 ちっくるたるさけ 動くのはパイセン
特別賞	石小あんぱんズ 東播磨地域防災の会



優勝

受賞者コメント

- 117KOBEぼうさいマスター育成会議A  
今まで普及員として救命処置を広めてきました。このように賞をいただくと今までの経験が身についているんだなとわかりました。今後も、一人でも多くの“いのち”を救うことができるよう普及活動に取り組んでいきます。
- チーム劇場型 チェーン オブ サバイバル～救急隊に引き継ぐまで～  
心肺蘇生法の“質”、倒れた人への“気遣い”、周りの人への“協力”などなど…大会当日はとても緊張しましたが、それぞれが落ち着いて協力し合い救急隊に引き継ぐことができました。また、表彰式の前行われたクイズ大会も優勝し、とても楽しい一日になりました。



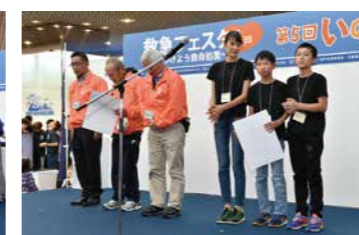
準優勝



準優勝



敢闘賞



特別賞

イベントコーナー

救命講習を行う資格を持つJR西日本の社員が講師となって「心肺蘇生・AED体験コーナー」を設置し、多くの方に救命処置を体験していただきました。JRや消防の「こども制服」を着ての記念撮影など、家族揃って楽しみながら「いのち」の大切さを学んでいただくイベントとなりました。



「1・2・3…」頑張って押し続ける



「AEDが音声で教えてくれます」



新幹線のパネルの前で「ハイ・チーズ」



消防服を着せてもらって「かっこいい」



ホームで危ないと思ったら「ここを押してね」



「大きな口だね!」



神戸市消防団の人気キャラクター「ウータン」と握手

体験された方の声  
(アンケートから)

- 胸骨圧迫の重要性がよくわかりました。
- このような体験をさせていただき、ありがたかったです。
- 来年も開催してほしい。などのお声をいただきました。



# 平成29年度 第4回・第5回・第6回 いのちのセミナー

今年度の「いのちのセミナー ～いのちを見つめて いまを生きる～」は全8回開催予定ですが、その第4回を10月6日(金)に、第5回を10月27日(金)に、第6回を11月24日(金)に、それぞれ毎日新聞オーバルホールにて開催しました。その講演内容の一部をお届けします。



第4回いのちのセミナー  
講師：若松 英輔氏



第5回いのちのセミナー  
講師：本郷 由美子氏



第6回いのちのセミナー  
講師：川島 実氏



会場の様子

第4回いのちのセミナー

## 見えない涙

～かなしみの詩学～

講師：若松 英輔氏

批評家 随筆家



### 見えない涙

宮沢賢治の詩に「無声慟哭」と題する作品があります。「無声」は声が出ていないことを意味します。「慟哭」は、声を張り裂けんばかりに泣くことです。「哭く」には「犬」の文字が据えられています。泣く声はときに獣のようにすなることを、この言葉は示しています。しかし、賢治は慟哭も極まれば、声を出さずに泣くことになる、というのです。奇妙に聞こえるかもしれませんが本当です。人は泣くとき、必ずしも大きな声を出すとは限りません。

同様に、悲しい人もいつも涙を流して泣いているわけでない。本当に悲しいとき、涙は潤れ、見えない姿で胸の中を流れ続ける。多くの人がこうした経験を持っているのではないのでしょうか。もし、そうだとしたら、目の前で笑っている人の心の奥にも悲しみがあるのかもしれない。むしろ、悲しみの底にあるとき、人は、それを他者に悟られまいと、微笑みを浮かべることもあるのかもしれない。そんな風にも考えられます。

### 5つのかなしみ

「かなしみ」は、さまざまな漢字で表現できます。「悲しみ」「哀しみ」「愛しみ」「美しみ」そして「愁しみ」です。

「悲しみ」は、悲痛、悲嘆、あるいは宮沢賢治は悲傷という文字を自身の詩に用いています。これは、身が砕かれそうになる「かなしみ」です。

「哀しみ」は、「哀れ」と書いて「あわれ」と読むように、他者のかなしみを自分のそれのように感じるはたらきです。

「愛しみ」、この言葉は、悲しみとは、愛するものが失われたことを意味するというを教えてください。悲しみは、

愛の発見でもあります。

「美しみ」、この文字は、かなしみの底には美が潜んでいることを、また、かなしみを生きる者の姿は実に美しいことを示しています。

「愁しみ」、この言葉をよく用いたのは詩人の中原中也です。この言葉で中也は、自己のかなしみを超越、歴史の、あるいは人類の「かなしみ」にふれたときの心持ちを表現しました。

5つの異なるかなしみが存在するわけではありません。少なくとも5つの「かなしみ」が折り重なるように存在していることを「かなしみ」という言葉の歴史は教えてくれています。

### 言葉を探して

ここにいる皆さんが、耐えがたい「かなしみ」、苦しみを経験されていると思います。人生には幾度か、歩き続けるのが難しいと感じさせる試練が訪れます。

そうしたとき、私たちの「つえ」になってくれるのは、言葉です。言葉は目に見えない。しかし人は、大きな困難にあるときもわずかな言葉を胸に抱きしめることで立ち上がることができる。もし私たちが、「つえ」である言葉を見出すことができれば、それをうまく見出せない人に手渡すこともできます。

2012年に父が亡くなりました。今から思うと父は私にいくつもの「つえ」を手渡してきてくれた。でも、彼が生きているとき私は、それをあまり役に立たない棒のように思っていました。そればかりか、「つえ」を手渡されるのが、わずらわしいと感じたこともありました。

たとえば、父がくれた言葉の「つえ」は、「からだを大事にしろよ」というものです。実に当たり前のことですが、本当に大切なことです。

彼は私をとっても大切に思ってくれていました。しかし、直接その口にすることはできない。「からだを大事にしろよ」とは、自分は息子であるお前を心から大事に思っている、ということの別な表現にほかなりません。

人は、ひとりの人が本当に愛してくれていたなら、絶望からでもはい上がってこられる。父は、世の中の人々がどんなにお前を非難することがあっても、自分はいつもそばにいる、ということを書いたのかもしれません。

大切な言葉は、しばしば、じつに凡庸な姿をして現われます。ですから私たちはそれを注意深く見つめなくてはならない。「つえ」になる言葉は、格言のような姿をしているわけではないのです。

### 書くということ

悲しみがなくなることはありません。愛があるところには必ず悲しみがあるからです。誰かを愛することは、悲しみを育むことだともいえる。しかし、悲しみの経験は人を生の深みに導きます。

そこで私が皆さんにご提案したいのは「書く」ことです。自分の心持ちを知っている言葉で、これまで一緒に生きてきた懐かしい言葉で「書く」ことです。

「書く」とこととメモすることは全く違います。メモするとき人は、





行っています。その中で私はいのちの価値について伝えていきます。人は自分のいのちの価値に気づいたときに隣の人も同じように大切に感じられるようになること、いのちには限りがあるから今生きている喜びを感じていのちをしっかりと生きる必要があること、誰もがみんな生きる力を持っているということ、私たちは一人ひとり違うけれど共に生きているということ、そして、今あるいのちには実は今あるこだけで守られているのではなく、犠牲になったいのちにも守られているということを伝えていきます。1人の人間が生まれるためには2人の両親がいます。その両親が生まれるためにはそれぞれの両親がいます。2代で4人、3代で8人、4代で16人。このように起源をさかのぼっていくと、20代で104万、30代さかのぼると10億になります。自分のいのちはこれだけのいのちの集合体だということを伝えることで、いのちというものはたくさんのいのちとつながっている、一人ひとりのいのちって大切だと感じてくれます。

娘が教えてくれたこと。私はこの娘の愛しみと共に生きています。私はこれまで恩返しのみりで活動してきましたが、これからは恩送りをしていこうと思っています。恩を送るということは、いのちをつなぐことだと思っています。人を思いやる気持ちがずっと脈々と継がれてきたからこそ、今あるいのちがつながれている。生物学的に次の子を産むことはできなくても、こうしていろんな人から受けとめたことを次の人や次の世代に送ることが、生きるということを支えること、生きることをつなぐことだと思っています。

「生きる」とは何かと訊かれたら、たくさんの「いのち」とつながりを持つことだと私は答えます。この社会にはいろいろな悲しみがあります。その悲しみの一つひとつに寄り添いあうことで安全で安心・平安な社会にしていけたら、と私は願っています。



## かなしみに寄り添って

このように私は悲しみと向き合って生きる力を自分の中に見つけていったのですが、一人では回復していきません。やっぱり寄り添ってくれる人がいないとここまで来られませんでした。

悲しみの中にある人は、自分の思いをどのように表現したらいいかわかりません。そばにいてくれる人に話すことで、自分の気持ちを理解することができます。悲惨な出来事を忘れるのではなく、自分の文脈に収めていくことで、何となく悲しみというものに折り合いをつけていくことができるのでしょから、語りにはただ耳を傾けて、その人生の語りをしっかりと共有することが大切だと思います。

寄り添うというのはいのちのいのちが支え合っているのだと私は思っています。悲しみというのは解消することはできません。自分自身で何とかして生きてきているわけですが、その悲しみに寄り添うことは、困難に向き合っている人の生き方を承認し、生き方の証人になることです。「あなたは、これだけ大変なことがあって、今こうして生きている。私はちゃんとそれを見ているよ、見守っているよ。共にいるよ。」これが本当にうれしい寄り添いになると思います。

関心を持つこと、それが寄り添うことの一步です。そこから始まります。そして、2.5人称の視点。他人事ではなく、自分にも起きるかもしれないという潤いのある視点と言われています。これは柳田邦男先生に教わったことですが、本当に我が事のように考え、その身になって寄り添うと、自分が何をしたいかということが見えてくると思っています。そして、どんな人にもその人にしかできないことがあります。あなたしかできないことがあるのです。誰かがもしあなたを選んで「助けてください」と言ったら、2.5人称の視点で寄り添ってみてください。きっとその人の生きる力の支えになると思います。

私は今は心の支援をされる側から支援する側になっています。両方の立場になるからこそ見えてくるものがあると思って、精神対話士やスピリチュアルケア師としてグリーンケアの活動をしています。

## いのちをつなぐ

私は今、「いのちの授業」というものを子どもや大人を対象に

## 第6回いのちのセミナー

# これが私の歩く道

講師:川島 実氏

医師 華嚴宗僧侶

## 京大医学部生のプロボクサー

僕は京都大学出身の両親から生まれて、子どもの頃は「命の次に勉強が大事」と言われてしゃかりきに勉強しました。奈良の東大寺学園に進んだ後、京都大学の理学部で動物の研究のよ

とは異なる亡き者たちからの沈黙の「コトバ」というべきものもまた、より明らかに感じるようになるのではないかと思います。

今日から書いてみてください。ぜひ、懐かしい、用い慣れた言葉で、ありのままを書いてみてください。他の人ではなく自分に、そして自分の大切な人にむけて書いてみてください。



の命が壊れてしまう、そうならないためにという自己防衛能力です。それに気づいたときには、自分の命の力をすごく恨みました。こんなものがなければ私は消えられるのに。でも、人間ってすごいな、そういう力があるのだなとも感じました。

私が前を向こう、生きようと思ったきっかけは、娘の最期の生きざまでした。傷は心臓を突き抜けていて、即死だと言われるような亡くなり方でしたが、出口に向かって廊下を68歩、距離にして39メートル歩いたと言われたのです。私は少しでもその苦しみを感じたいと思い、毎日毎日その廊下を歩きました。最初は苦しんでいる娘の顔しか見えなかったのですが、ある時、廊下から思いっきり笑顔で走ってくる娘が見えたので、思いっきり抱き締めて「よく頑張ったね」と言えたのです。娘は命がけて、命を断とうとしている弱いママにかけがえのない命の尊さ、生きることを意味、生き抜くことの強さを教えてくれているのだと思いました。娘が最後まで希望を捨てずに歩き続け死力を尽くした68歩。私は本当に生きるのがつらかったけれども、その廊下で前を向いて歩こう、命尽きるまでしっかり生きようと誓いました。

## 「悲しみ」から「愛しみ」へ

大切な人が亡くなったということを受け入れることはなかなか難しい。私は娘は心の中にいると位置づけました。亡くなってしまってもう会えないけれど、愛(かな)しみとして心の中に生きていると思えるようになりました。最初は悲しみを背負って生きるしかないと思っていましたが、そのうち悲しみと向き合っていくと思えるようになり、そしてそれがだんだんと悲しみと共に生きていこうというふうに変化していったのです。

かなしみという字は、「悲しみ」「哀しみ」「愛しみ」と書くといいですが、私は悲しみと向き合って、いろいろな方に寄り添ってもらったおかげで、悲しみを受け入れることができました。激しく泣くのではなく、愛おしくてやわらかい、優しい愛しみに変わってきたのです。

何を書くべきかを既に理解している。しかし、ここでいう「書く」とは、実際に文字を刻んでみて自分が何を考え、感じ、そして生きているのかを改めて認識しようとする行いです。

本当に「書く」ということが起こるとき、そこに生み出された言葉に、最も驚くのはそれを読んだ他者ではなく、自分自身です。

また言葉は、人間がこの世にもたらすことができるもののうち、最も美しいものの一つではないでしょうか。それは「つえ」でもありますが、枯れることのない花のようにも感じられます。人は、自分に必要な言葉の「つえ」、言葉の「花」を、誰かに頼ることなく、自分で見つけることができます。

さらに、言葉は贈り物になる。身近にいる人はもちろん、それは亡き者たちへのこのうえない捧げものになります。

文字は目に見えますが、言葉の本質である「意味」は目に見えません。しかし、たしかに存在する。人は言葉を書くことで、目に見えないが、疑うべくなく存在するものをはっきりと感じる経験を繰り返すこととなります。そのとき私たちは、生者の「言葉」

## 第5回いのちのセミナー

# 生きる力

～愛しみと共に生きて～

講師:本郷 由美子氏

大阪教育大学付属池田小児童殺傷事件被害者遺族精神対話士



## 68歩、そして前へ

私は2001年、今から16年前に犯罪被害に遭い、当時小学校2年生だった娘を亡くしました。娘を失い、本当に私は希望を失いました。世界が全て灰色に見え、動くものが全部スローモーションに見えました。音もはっきり聞こえないし、食べたものも全く味がしない。かたい・やわらかい、冷たい・温かいという感覚すら感じなかったのです。私はこのまま自分が消えてなくなってしまうばいいと思いました。しかし、実はこれは私の生きる力だったのです。これ以上いろいろな刺激を受けたら自分

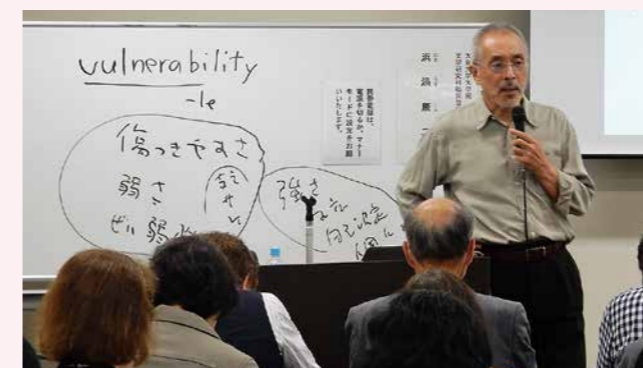


# 平成29年度公募助成活動紹介

平成29年度公募助成団体の10月から12月までの間の活動内容をご紹介します。  
 いろいろな有意義な活動(イベント)が実施されました。

## かなしみぼすと

10月7日(土) 3回連続講座「かなしみとともに生きる社会へ」



当該団体が主催されている3回連続講座「かなしみとともに生きる社会へ」の第1回目が開催されました。

講師は、大阪大学教授で上智大学グリーンケア研究所(大阪)でも「ケアの臨床哲学～生老病死とそのケア」の講義をされている浜渦辰二氏がつとめられました。初回は「老いとともに生きる」をテーマに、「喪失」だけでない老いによって「獲得」できることについて、わかりやすく説明されていました。定員を大きく超える参加者があり、皆さん熱心に受講されていました。



## 京都技術士会理科支援チーム

10月8日(日) 東日本大震災復興支援「こども理科実験教室2017」



東日本大震災で被災した子どもたちに理科のおもしろさを知ってもらうことで「夢」を与え、将来の優れた理系人の育成につなげていく科学教室を福島県郡山市で2日間にわたって開催されました。

この教室は、技術士という科学技術の専門家が震災からの復興を願って企画したもので、2日間で約80名の参加がありました。実験と観察を繰り返して行い、学校ではできない理科実験の楽しさやおもしろさを体験した子どもたちの笑顔が印象的でした。



## 北区救急ボランティア

11月3日(金・祝) 聴覚障害者のための心肺蘇生法の体験会(救急フェスタin神戸)



当財団が主催した「救急フェスタin神戸」の会場内、聴覚障害者の方々を対象とする心肺蘇生法の体験会を開催されました。

当日は手話通訳者も常駐され、たくさんの方が参加されました。子どもの心肺蘇生法やAEDの使用法などを手話を交えながら説明し、参加者は真剣な表情で体験されていました。自分たちもできる範囲で人の命を救うことができる、そんな自信につながる体験会でした。



## 特定非営利活動法人 大阪ライフサポート協会

11月5日(日) 肢体不自由者向け心肺蘇生&AED講習会



「身体が動かなくても人を助けられることができるかもしれない」をテーマに、肢体不自由な方々が自分に合ったAED使用方法を探していく講習会を開催されました。

参加者2~3名毎に1人のインストラクターが付き、具体的な心肺蘇生法やAEDの使用手順を学びました。手が使えない方のかかどで胸骨圧迫をする、しゃがめない方は他の人に使用方法を指示するというように、一人ひとりの気づきをその場で付け加えていました。「自分も命を救うことができる」という自信と実感を持てる大変有意義な講習会でした。



僕らの病院からも交代で医療ボランティアに行きました。最初は軽い気持ちで行ったようなところもあったと思いますが、行ってみると360度瓦礫で、町中に何か腐ったにおいが立ちこめていました。自分の足で降り立った時にもすごいショックを受けてしまって、これは何とかしないとだめだと思いました。常勤医ゼロの気仙沼の病院で半年ボランティアをして、その後院長になりました。そこで3年程べったり地域医療、在宅診療中心の医療を組み立てて、始めた時は1万人の町で医師が私1人という状態でしたが、3年経って5、6人に増え、日本中から研修医が来たり、学生が見学に来たりするような病院に育ちました。

## 奈良に帰り僧侶に ~導かれて生きる~

そんな中で、奈良の親父が倒れました。親父の病状がどんどん進んで、来年の夏までもたないと聞き、よそのおじいちゃん、おばあちゃんばかり看取っていないで、自分の親父を看取ろうと思って、奈良に帰ってきました。

帰ってくる直前に、一緒に働いていた介護のスタッフから「先生、お父さんに『ありがとう』と言いましたか」と訊かれて、「いや、言うわけないじゃないか」と答えました。その彼女は頑として「ありがとうと言ってください」と言うので、僕は帰って親父にとりあえず「ありがとう」と言いました。それを聞いた親父は何ともいえない嬉しそうな顔をしました。「ありがとう」と伝えてから2週間後、本当にそのことで最後の突っかかり棒が取れてしまったのではないと思うくらい、ふにゃっと亡くなりました。

それでお坊さんになったというわけではありません。東大寺学園の先輩が東大寺で偉いお坊さんになっていますが、僕が東北で働いているときに、彼が東大寺学園の生徒を連れて被災地にボランティアに何度も来ていました。その先輩からお坊さんにならないかと言われたのです。スカウトされてお坊さんになる人はなかなかいないと思います。今から思えば、もともと東大寺学園に進学したのも、こんな時代に医療の仕事をしているのも、親父が倒れて奈良に帰ったのも、大仏様のお導きなのかなんと思ったりしています。

僕は今、10数カ所の病院でアルバイトしていますが、日本中で地域医療ってこんなにおもしろいものだよと語って歩いて仲間を集めています。僕の同級生は難しい病気の研究に進んでいった者が多いですが、僕は地域をおもしろくするほうで世の中に貢献できたらいいかなと思いつつ、お坊さんとしての活動もしています。



うなことがしたかったのですが、親や学校の先生から「もったいないから医学部へ行け」と言われて、医学部に入りました。

入学後は体を鍛えようと思ってボクシング部に入り、4年生の春のリーグ戦では全勝優勝も経験しました。ちゃんとお医者さんになろうと思わないまま6年生になった僕は、同級生が小児科に行くとか内科に行くといった話をしているときに、プロボクサーになりました。受けを狙ったわけではないですが、京都では話題になりました。デビュー戦は勝てませんでした。全日本新人王のトーナメントで決勝まで行きました。

連勝している勢いで結婚したり子どももできたりして、かなり充実していたのですが、プロボクサーといっても多い年で年収100万円程でした。収入が少ないので、プロボクサーというのは日中働いて、夕方仕事が終わってからジムに来て練習しているというのが一般的でした。僕は自分の子どもを授かった時に、日中働いて夜ボクシングしたら子どもをみる時間がないなと思い、薬剤師の妻に日中働いてもらって、彼女が帰宅してからジムに行くといったような暮らしをしていました。29歳で1ラウンドKO負けするまで、5年くらいプロでやりました。

## 自給自足農家から医者へ

プロボクサー引退後は、和歌山の串本町で稲作を始めることにしました。当時、一番上の子がアトピー性皮膚炎で、水や空気がきれいなところでいいものを食べたらよくなるのではないかなと思って、自給自足を目指しました。初めの年は結構豊作で、1トン程獲れました。これは結構やっていけるのではと思いましたが、高い米でもスーパーで買くと10キロ5,000円くらいです。1トンで50万円。僕の年収は50万円だったのです。1年で農業の厳しさにぶち当たりました。

そこで、「自分には医師免許があるじゃないか」と思いました。僻地で医者の仕事を探し始めると引く手あまたで、老人ホームの嘱託医と精神病院などかけ持ちでアルバイトしながら仕事を覚えていこうと思っていました。でも、1年くらいするとやはり苦しくなってきた。そんな時、京都の漢方の大家といわれる先生から声がかかり、京都で1年勉強して、何となく漢方っぽい診療ができるようになりました。しかし、レントゲンや心電図を見てもわからず、この世界で生きていくには脈とか陰陽とか言っていたらだめな気がしていた頃にボクシング部の先輩が連絡をくれて、今度は沖縄の徳洲会病院という救急車が数珠つなぎで入ってくるような病院に移りました。

そこでちゃんと聴診器とかレントゲンとか使えるような医者になるべく育ててもらいましたが、忙しくて家に帰れませんでした。徳洲会というのは全国にあり、山形県庄内の病院の先生に「うちでやらないか」と誘われたのを思い出して、そちらに移してもらいました。山形の病院に来たら、平日はたくさん医療の勉強ができて、土日は家で帰れるという恵まれた暮らしになりました。

## 災害医療チーム参加から患者中心の地域医療へ

山形に行って3年目の終わりに東日本大震災が起きました。



## angel heartの家族の会

11月7日(火) グリーフケア講演会



グリーフケアに対する知識向上や、関心を高めることを目的とした病院スタッフに対する講演会を開催されました。最初に大阪発達総合療育センターの船戸正久副センター長から「小児医療におけるグリーフケア」と題し、関係する家族の思いも含めた講話がありました。また、生後5ヶ月で子どもをなくされたご遺族が、当時の看護師や主治医への感謝とともに体験談を涙ながらに話されました。ケースワーカーや病院の車の運転手など、様々な職種の人が参加され、涙を流しながら熱心に聴き入っている姿が印象的でした。



## 一般社団法人 兵庫県子ども会連合会

11月11日(土) 安全啓発指導者養成講習会



防災とは何かを理解し、地域の実情に応じた活動の運営ができる指導者を養成するための講習会を大阪府内で開催し、地元子ども会や近畿の子ども連合会の方々が参加されました。まず、講師から「自助、公助、共助」それぞれの大切さと必要性について説明があり、その後グループで地図を見ながらしばらく街を歩きました。じっくり探索すると今まで目につかなかった水害の際の危険箇所なども確認することができました。参加者からも有意義だったとの声が多く聞かれました。



## 特定非営利活動法人 インターナショナル

12月3日(日) 駅を拠点とした避難者支援ツールづくりワークショップ(避難所マップ編)



災害時に利用できる駅を拠点とした避難者支援マップの内容検討を目的とする街歩きワークショップを開催されました。堅苦しい活動ではなく、楽しんで参加してもらったための工夫がされていました。三ノ宮駅周辺の避難所を2ヶ所以上訪れる間に、チーム毎に写真映えのする場所を撮影し、その情報を加えた避難マップを作成していくというものでした。最後は作成したマップをお互いに披露しながら、必要な情報や感想を共有していました。災害時の相互協力につながっていく、とてもよい活動でした。



## 特定非営利活動法人 鍼灸地域支援ネット

12月16日(土) 京都府災害鍼灸マッサージコーディネーター研修オープン講座



鍼灸師やマッサージ師を対象に2部構成の講座を開催されました。第1部は高槻赤十字病院の岡本医師を講師に迎え、地震災害時に多発するエコノミッククラス症候群の見極めについての講習でした。第2部は武蔵野赤十字病院の勝見医師を迎え、「災害時の避難所評価」と題し、災害時の避難所での実体験に基づいたワークショップが行われました。避難所の情報や避難者の状況についての日報を共有しながら、自分たちに何ができるか活発な議論が交わされていました。



アンケート実施中

毎号、皆様からご好評いただいておりますReliefにつきまして、いつもご感想をお聞かせくださり、ありがとうございます！  
今号についてのご意見やご感想もお待ちしております。(https://www.jrw-relief-f.or.jp/enquete/)



### 編集後記

「救急フェスタ〜いのちのリレー大会〜」を神戸で初めて開催しました。参加者の皆さんからは目の前の命を救いたいという熱意を感じました。当財団では今後も救急フェスタ等を通じて救命処置の普及啓発に取り組み、一人でも多くの命が救われることにつながるよう活動してまいります。(岡)

### 広報誌「Relief」 2018年1月号(vol.30)

【表紙写真：第5回いのちのリレー大会優勝チームとその仲間の皆さん】

Relief(リリーフ)には「ほっとする、安堵。安心」といった意味があります。当財団は、「安全で安心できる社会」の実現を目指した事業に取り組んでいます。

編集発行/公益財団法人JR西日本あんしん社会財団 〒530-8341 大阪市北区芝田二丁目4番24号  
TEL:06-6375-3202 ホームページ:https://www.jrw-relief-f.or.jp/

